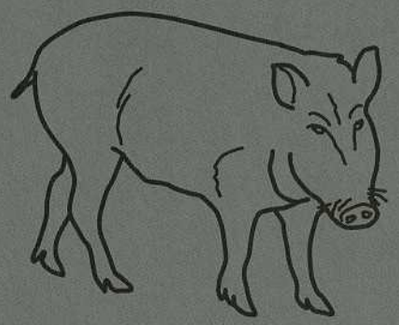
生きもの博物誌

【リュウキュウイノシシ】
南西諸島



イノシシと暮らすシマ

大西 秀之
（おおにし ひでゆき）

同志社女子大学准教授

奄美のイノシシ猟

鹿児島県の奄美大島において、フィールドワークをしていたときのことである。ふと、林道入口にある看板が目に入った。それは狩猟者に対して注意を呼びかけるものであった。それまでにも、何度か調査のために訪れていたはずの場所であったが、そうした看板を気に留めたのは、そのときがはじめてであったように思う。だが、よくよく注意してみると、そこかしこに狩猟に関係する看板が掲げられていることに遅まきながら気づいた。

この経験がきっかけとなって調べてみたところ、シマには、かなりの人数の狩猟者がいることがわかった。そして、狩猟の対象となっているのが、もっぱらイノシシであることを知った。

奄美大島における「シシ猟」―シマの人は一般にイノシシを「シシ」とよぶ―は、現在、銃猟と罠猟によっておこなわれている。もっとも、銃猟であれ罠猟であれ、シシ猟をおこなうシマの人びとは、イノシシの生態・行動に関する豊かな民俗知識をもっている。たとえば、イノシシのとおり道を知ることは、猟の成否を左右するため、狩猟者たちは「シシ道」の把握に余念がない。ただ、そうした知識のなかには、「ほとんどのシシは右利きであるから、右前足に掛かるように罠を仕掛ける」といったような行動学的に裏づけられないものも含まれている。とはいえ、それもまた、シシ猟のなかで継承されてきた奥深い民俗知識にほかならない。

イノシシの両義性

イノシシ猟は、シマの暮らしに深く根づいた営みである。何よりも、イノシシの料理は、シマでは御馳走のひとつである。このため、奄美大島の中心である名瀬の市街では、シシ料理を出す飲食店を少なからず目にすることができる。

もっとも、こうした食としての需要以上に、シシ猟の多くは、害獣駆除という名目の下におこなわれている。実際、イノシシによる農作物被害が、奄美大島の各地で頻繁に起きている。このような被害を裏づけるように、イノシシから農作物を守るための「シシ垣」がシマのあちらこちらに設置されている。イノシシは、山の恵みであるとともに、田畑を荒らす招かれざる厄介者でもあるのだ。

ただその一方で、シマのイノシシは、南西諸島のみに生息する固有種であり、現在、環境省のレッドデータブックに記載される絶滅危惧種となっている。田畑を荒らす害獣でもあり、絶滅が危惧される保護すべき希少種でもあるイノシシは、シマの人びとにとって非常にアンビバレント（両義的）な存在である。

「環境アイコン」としてのイノシシ

このような両義的なイノシシのあり方は、今日、シマが直面する環境保護という課題にも繋がっている。とりわけ近年、奄美大島は、生物多様性を保持する豊かな自然を背景として世界遺産への登録を模索しており、環境保護は急務な課題となっている。

しかしながら、環境保護の取り組みは、よそ者が考えるほど簡単なものではない。離島であるシマの暮らしを維持しつつ、どのように環境を保護して行くかは、まだまだ手探りの状況が続いている。

イノシシを例に引くならば、農作物が被害に遭うのを我慢してでも、希少なシマの固有種を守るために狩猟を規制できるか、という問題となる。より率直に言い換えるならば、イノシシ―ひいては環境―を守るために、シマの人びとに不利益や犠牲を強いることができるか、というシビアな問いかけとなるだろう。そういった意味で、イノシシは、まさにシマが抱える環境問題を意味する「アイコン（表徴）」とみなしうる存在といえよう。

イノシシのとおる土手の「シシ道」

イノシシから農作物を守る「シシ垣」

イノシシ用のワイヤー罠の設置作業

シシ猟でしとめられたイノシシ
（提供：尾方司）

飼育されているイノシシ（提供：尾方司）

シマの御馳走である「シシ料理」
（提供：神松幸弘）

リュウキュウイノシシ（学名：*Sus. scrofa riukiuanus*）

リュウキュウイノシシは、ニホンイノシシ（*Sus. scrofa leucomystax*）の南方亜種で奄美大島、徳之島、沖縄本島、石垣島、西表島に分布している。それぞれ地域による違いはあるが、おおむね体長90～110cm、体重40～70kgと、ニホンイノシシに比べるとかなり小型である。生態的・行動的特徴は、ニホンイノシシとほとんど差異はないが、繁殖期が春と秋の2回ある。これは、生息域が亜熱帯であるためと考えられている。なお、ニホンイノシシとの系統関係については、同種が島嶼化で小型になったものとの見解が一般的であるが、頭骸骨の形質などから原始的な別種とみなす見解もある。

（提供：尾方司）